

解体の勇者の 成り上がり冒険譚

Kaitai no Yusha no
Nariagari Boukentan....

3



muboutotsugekimusume

無謀突撃娘

Main Characters...

主な登場人物

ジーグルト伯爵

領地に鉱山を持つ大貴族。
とある悩みを抱えている。

シュニー

大農家の美人三姉妹の長女。
セクシーで色っぽい。

エーディン

ジーグルト家の娘。
ちょっとした動きで胸が揺れる。

シェリー

大農家の美人三姉妹の次女。
明るく行動的。

ユウキ

本作の主人公。役立たずとして
勇者のパーティを追放された。
得意の解体技術を駆使して
成り上がっていく。

アリーナ

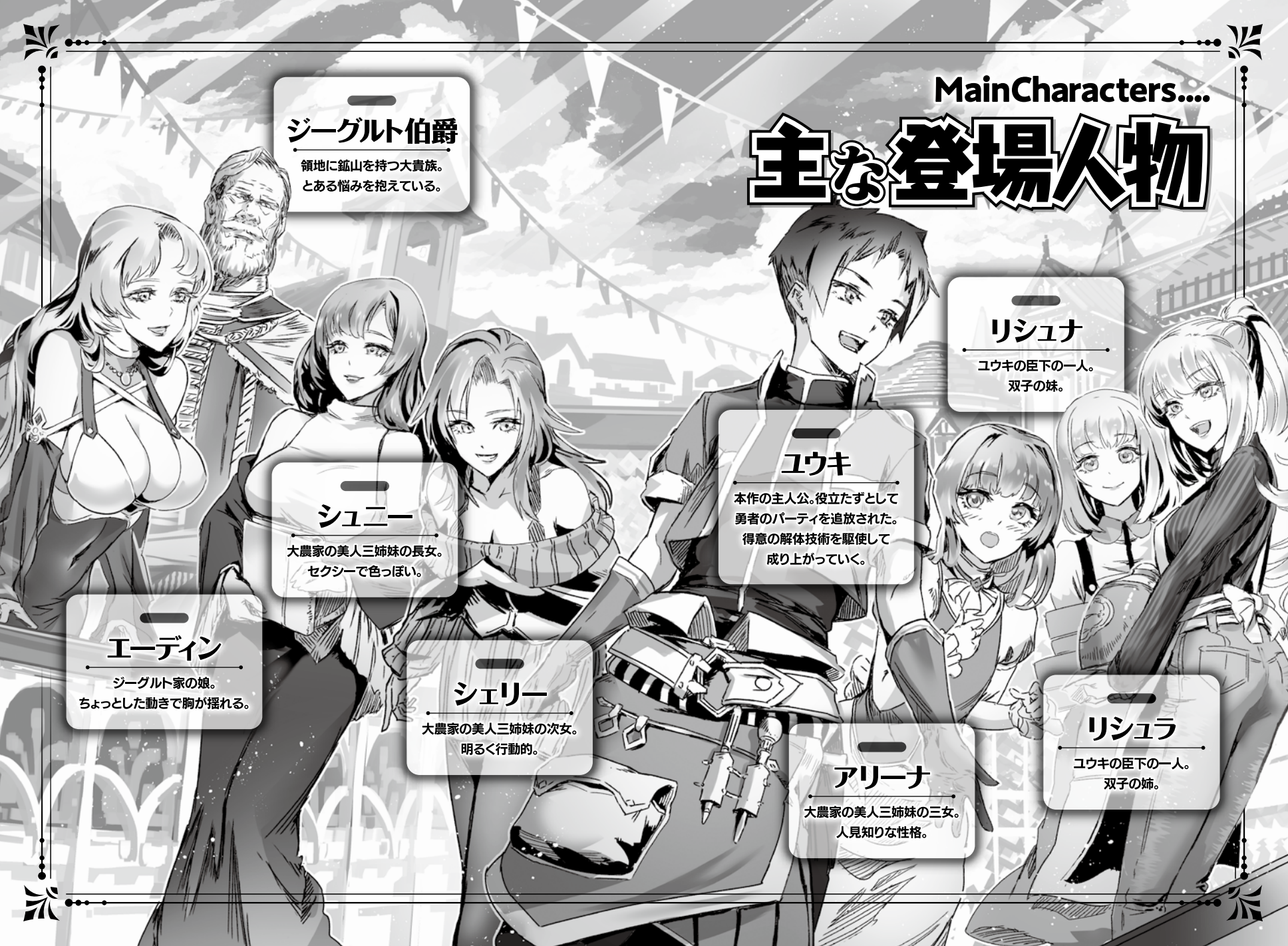
大農家の美人三姉妹の三女。
人見知りの性格。

リシュナ

ユウキの臣下の一人。
双子の妹。

リシュラ

ユウキの臣下の一人。
双子の姉。



第一章 陶芸伝承

ユーラベルクギルド支部長室に、リサギルド支部長、その甥である少年のムルカ代爵、そして数多くの技術者たちが集まっていた。

皆一様に、ムルカ代爵が持ってきたあるモノを凝視している。

それは器であり、その素材は木材ではなく不思議な何かであった。

土のように感じられるが、表面の光沢には深い渋みがあり温かさがある。触った感触は滑らかで金属に近い。それなのに持つてみると軽い。白、茶、緑などの色が付いており、その塗料は完全に定着していた。

このような不可思議な物は冒険者ギルドの歴史には存在しなかった。様々な学者や研究者を抱えるギルド支部でも初めて見たと――

リサは問いかける。

「ムルカ代爵」

「……は、はい」

おずおずとムルカは返事をする。ギルドの幹部らが集まっており、緊張しているのだ。彼はこのような会合に出席するのは初めてだった。

「これは何なのかと問うているのです」

リサが強い口調で尋ねると、ムルカは懐から手紙を取り出す。

器の製作者が記したという手紙の出だしには、「木製食器に代わる工芸品」とあった。さらに、次のようなことが書かれていた。

村の近くの山々には、この陶器の元となる上質な粘土が無尽蔵に埋まっている。それを独占して製造・販売すれば、莫大な利益が得られる。そして、この器の製造法にはさらに発展が期待できる技術がある——そうしたことが短くまとめられていた。

リサは手紙の内容に驚きつつ、その要約を周囲にいた者たちに伝える。

幹部の一人が前のめり気味に発言する。

「で、では！ 最優先であの辺りの土地を買い占めましょう」

現在、ギルドが所有している土地は村の周囲のみ。もっと広い範囲まで買い占めれば、今後ギルドにどれだけの利益を生み出すのか……

幹部たちは息を呑み、口々に言う。

「この器は、土地所有者に見せないほうがいいでしょう」

「そうだな。見せると売るのが渋るだろう」

「さようだな」

全員の意見が一致し、「この器は当分秘匿すべきである」そして「土地や必要な物資などを先に買い占めるべきだ」ということになった。

いったん話し合いを終えたところで、幹部の一人がムルカに話しかける。

「ムルカ代爵」

「は、はい」

「持ち込まれた新技術である陶芸は、実に素晴らしいものであった。この功績をもって、貴殿を正式な『職業貴族』に任じたい」

「ええっ。僕がですか……！」

「なお、正式な爵位の授与はしばらく先だ。それまでに現地で、器を製造するための材料、道具、職人も揃えねばならぬ。この情報は絶対に他言してはならぬぞ」

「は、ははっ！」

ムルカは思わずひれ伏す。

「この器は倉庫の奥深くに隠して、保管しておこう」

幹部がそう言うと、その場は静まり返った。

次に議題に上がったのは、これを製作した人物についてである。

さっそくムルカがその者の名を告げると、幹部たち皆唖ってしまった。

「……ユウキ、か。以前から噂のあった人物だな。ようやく馬鹿な連中から解放されたというわけか」

「はい」

勇者パーティの一人「解体の勇者」として数々の功績を挙げながらも、パーティでは冷遇され続けていたユウキ。

その名は、ギルド幹部であれば知らぬ者はいなかった。

「で、率直に聞くが、これを量産するには何が必要なのか」

幹部の質問に、ムルカは戸惑いつつ答える。

「……それについては、何も聞いておりません」

「ふむ、現時点では技術の公開はしないということかな」

「そういうわけではないようで……」

ムルカがどう答えて良いか分からずに口ごもっていると、幹部は推測して問う。

「では、技術の修得に時間がかかるということか」

「……そのようです」

ギルド幹部たちが話し合いを始める。

「これだけの品物、ある程度未知の新技术が使われてもおかしくないものですからな」

「で、あれば、いち早く押さえておく必要があるか」

「金や銀の食器など、おいそれと一般市民が手が出せるものではありませんから。この器が流通するようにすることは必定」

ギルドの方針は、次のように決定した。

「人材をユウキのもとに派遣しよう」

すぐさまギルド幹部らは部屋から出ていくのだった。

その場に残されたのは、リサとムルカだけとなった。

ムルカがリサに声をかける。

「リサ叔母さん」

「ムルカ、以前から言っていたでしょう。賢人と巡り合えば、必ず結果がついてくると」

「……はい」

ムルカはそう口にする、涙を流した。

それは喜びの涙だった。自分の身分が、いつ失うかもしれない代爵から、正式な職業貴族に変わったのだから。

ムルカが治める、名もなき村に多くの人が訪れている。

彼らは全員、ギルドがよこした人材であり、目的はただ一つ。僕、ユウキが考案した、陶器製造術の修得だ。

僕はムルカとともに、集まった人々を見る。

「えらくいっぱい来たね」

「ええ」

老若男女、様々な人たちがいた。彼らに課するのは肉体労働の類ではないが、修得には時間を要する。素質、知識、感性が大事なので、挑戦する人が多いに越したことはないか。

僕がそう思っていると、ムルカが大声で告げる。

「こちらにおられるのが、師となるユウキ代爵だ。まだ正式には貴族の爵位は得ていないが、ここでは彼の命令に従うように」

「[[[はっ]]]」

人数はざっと二百人ほど。この中からどれくらいが物になるのか分からないが……あれやこれやと論ずるより、実践して見せたほうが早いかな。

僕は皆に向かって言う。

「材料を調達することから始めてもらいます」

さっそく全員を連れて、近くの山までやって来た。

まずは粘土層を取り出そう。

僕は、皆に鍬と鋤を装備させると、作業を始めさせた。

「[[[うんせ、ほっせ]]]」

彼らは真面目に働いた。

ギルドからの人材だが、それぞれいろんな事情があって定職に就いていない。身内に不幸があったり、病気を患っていたり、怪我をしていたりと様々。そんなわけで彼らは、職に就けるかどうかの瀬戸際とも言え、真剣に取り組んでいるのだ。

取り出した粘土層を、馬車に積み込んでいく。とにかく量が必要なので、ありつたけ積んでもらった。それを、僕は窯場近くの保存場へ入れた。

陶芸の作業場に来て来た。

続いて「成形」の作業に入るのだが、ここからが大変だった。

粘土層を器の形にするにはしっかりとした技術と経験がなければ難しく、単純な椀状にすること

すら、初心者には困難なのだ。

僕が、彼らの目の前で何度となく手本を見せても――

「また歪んだあ」

「へこんだ」

「土がまとまらない」

やはり上手くいかない。このような土いじりの経験者は皆無だからな。僕は「……これは時間がかかりそうだ」とぼやくしかなかった。

そんな僕に、ムルカが尋ねてくる。

「ユウキ様、製造の目処は立ちそうですか？」

「なかなか時間がかかりそうだね」

何しろ成形の段階で苦戦しているのである。当分は粘土と格闘する必要があるだろう。「素焼き」までなら早ければ二ヶ月ほどでいけそうだが、「本焼き」となると……

そうして粘土と格闘する人たちを眺める日々が始まった。

× × ×

陶器製作の最初の一步である成形に、悪戦苦闘するたくさんの人たち。

いきなり大きな物や複雑な物は製作できないので、小ぶりの茶碗などの製作の際に使われる技法、「手びねり」からスタートさせる。これなら必要となる粘土も少なくていいし、やり直しが利く。手びねりで思い通りの器を作れるようになるのが最初の一步だ。

何度となく手本を見せて実践させていく。

教師をやりつつ、僕は僕で自分用の器を作り続ける日々を送っていた。

「ユウキ」

ある日、ギルド支部長のリサがやって来て声をかけてきた。後ろに、十数名の集団を随伴している。

「こんな村まで直々に来られるなんて。どうかされたのですか？」

「手紙に書いてあった内容だけでは、必要な道具、材料、設備などが分からなかったから、それを聞くために来たのよ。あと、商売に詳しい人たちを連れてきたわ」

確かにムルカに渡した手紙には、最小限の内容しか書かなかった。おそらくだが、ギルドで陶器を製作・販売することに決め、いろいろ準備する必要が出てきたのだろう。

リサに連れられた者たちが挨拶してくる。

「初めまして、ユウキ殿。ウッドロウといいます」

「ワシはラスナー。工芸品店の店長じゃ」

「私はミライナ。主に貴族へ売る販売品の交渉役ね」

三人以外にも多くの人から声をかけられた。それぞれ偉い立場にあったり、交流関係が広そうだったりした。

「さっそくだけど、作業場を案内してもらえるかしら」

リサに言われ、僕は皆を先導する。

作業場と作業内容について一通り解説したあと、成形して間もない器を見せた。すると、ウッドロウたちは困惑した表情を浮かべる。

「これはどう見ても……土くれ、としか思えんのだが」

「持ち込まれた物のような色合いはどこにもない。形状は簡素、せいぜいコップぐらいの物しかないが……」

「いくら新技術とはいえ、ギルドから派遣した技術者の能力を考えれば、もう少しマシな物ができると思っただけだ」

そうは言ってもな。そもそも製作途中だし、まだ皆初心者なので平易な形状の物しか作れないのだ。

「いきなり高度な技術を要する物を作らせるのは難しいと判断したので、今はまだ簡素な器しかないんです。それにまだ製作途中です」

僕がそう説明すると、ウッドロウたちは一応納得したようだ。

「そうであるか。前に見せてもらった器のような物ができるのであれば、ギルドにとって大きな市場になるはずだ」

「では、製作工程の話に戻りますね」

次に見せたのは、成形後に乾かした器だ。

「これが、数日間しっかりと乾燥させた物です」

乾燥させることで固まり、ちよつと乱暴に扱ったくらいでは壊れなくなる。そのことを説明したところ、ウッドロウは首を傾げる。

「なぜ、ここまで念入りに乾燥させる必要があるのだ？」

数日間という手間に引っかけかきを感じたらしい。

その疑問に対しては、「後の工程で明らかにする」と答えておいた。

いよいよ大がかりな作業に入る。しっかりと乾燥させた土の器を、弟子たちに窯の中に配置してもらおう。

そして、窯の入り口にたつぷりの藁を置いておく。

「ここからが重要な工程です」

「窯の入り口に藁を置くのはなぜかね？」

「こうするからです」

僕はそう言うと、用意しておいた松明^{たいまつ}に火を灯す^{とも}。

「まさか！」

数人が驚いている。僕が何をするのか分かったようだ。僕はためらうことなく、松明の火を藁^{わら}に移した。

ポオオオー。

藁^{わら}が燃え出し、徐々に火は強くなっていく。窯の入り口から細い薪^{まき}を足すと、火が薪に移り勢いを増す。

ゴオオオオー。

激しい炎が窯の入り口から噴き上がった。

炎の勢いと薪の燃え方を見て、火かき棒を動かし、太い薪を継ぎ足していく。そうして、素焼きに必要な温度である八百度まで一気に上げた。

木炭を入れ、火の勢いと状態を見る。

目標の温度に達したら、その温度を維持する。しばらくそのままにして窯の温度が完全に下がったら、素焼きの完了である。

翌日、慎重に器を外に出していく。

「割れやヒビが入ってるのは……ほとんどないか」

僕が器の一つひとつを調べていると、周囲で見ていたウッドロウたちが呟く。

「ううむ。まさかこのような方法で製作していいよとは。窯の中で割れてしまうのを防ぐために、数日かけてしっかりと水分を飛ばし、乾燥させる必要があったというわけか」

「土を成形して、乾燥させ、高温の窯で焼くとは」

「誠に高度な技術よ」

まだ素焼きの状態なのだが、この時点で価値ある物だと判断したらしい。手に取り、触り、じっくり調べている。

「ユウキ、これで完成ですか？」

聞いてくるリサに、この状態で水を入れたら漏れてしまうので、ある意味これから本番だと説明した。

事前^{まえ}に作っておいた釉薬^{ゆうやく}を塗る「釉^{ゆう}がけ」および「絵付け」の作業に入る。

釉薬の製作方法はいろいろあるが、手に入りやすい灰を原料とした釉薬を使う。

窯から取り出した器に、塗り^{ぬり}と絵付け^{えつけ}を慎重^{まじめ}に行う。斑^{まだら}にならないように全体にしっかりと塗る。色合いは今はまだ簡単なものしか出せない。

その様子を不思議そうに観察するウッドロウたち。

「いったい何をやっているのでしょうか？」

「何か濁った液体を塗っているようだ……」

「馬鹿！ 黙って見ていろ。あれは熟練の技術を要する慎重な作業だ」

「この素焼きという品ですら、我らの常識を超えておる」

「これはギルドの歴史において、重要な出来事になるやもしれませぬぞ」

僕らの作業を遠目に見ている外野が騒がしい。だが、僕は気にせず作業に没頭する。釉がけを終えてから、丸一日乾燥させるのだった。

翌日、完全に乾いたのを確かめてから、いよいよ本焼きに入る。

素焼きのときより、高温に耐えられる窯を使う。

慎重に器を並べて、入り口を狭くするため粘土で覆う。小さな入り口となったそこに、火つけ用の藁を入れた。

着火したら、細い薪、太い薪、木炭と素早く火を移して一気に高温に持っていく。さらに木炭を足していき、今度は千度まで上げる。火かき棒で木炭を動かし、火の流れと勢いを調節する。

火の動き、温度、時間、一つでも間違えただけで台なしになってしまう。職人にとつてもっとも緊張する時間だ。

僕の作業を見ていた一人が、リサに声をかけた。

「リサ様、これほどの高火力を自由自在に扱う者など、これまで見たことがありません」

全員が、僕の行動すべてを見守り、何も口出しせずにいる。きっと、目の前で行われていること

が、彼らの常識を超えているからだろう。

「これほどの高温……どう考えても、中の器は跡形あとがたもなくドロドロに溶けていると思うのですが……」

周囲にいた全員が頷いている。

そこへ、リサが告げる。

「皆、今は静かにユウキが行うことに注目しなさい。結果はすべての工程が終わったあと確認すればいいのです」

僕には、外野の声に反応している余裕などない。

何しろ、この作業に仕上がりが懸かっているのだ。

僕が持つ知識と経験を最大稼働させ、本焼きを行う。ときに動かし、ときに待ち、長い時間が過ぎていく。

そのまま時間は過ぎ去り、火の勢いは収まり、本焼きが終了した。

気づけば、日が落ち、真っ暗な時間帯になっていた。作品を取り出すのは明日だな。さあ、中身はどうなっただろうか……

さらに翌日。

作品は無事完成し、上出来と言える品質だった。

その後、僕は使った窯のチェックを始める。

口元を布で覆い、汚れていい服に着替えておく。

窯の中は、黒ずみがそこかしこに付いていた。それを藁を束ねた箒ほうきでゴシゴシと落とす。しつかりと落とさないと、次の焼きに影響が出るのだ。

数時間かけて汚れを落としたり、次は中と外のチェック。窯が高温に長時間さら晒されていたため、亀裂きれつがあったり穴が開いたりしていないか調べる。

そうして窯の掃除をしてから、しばらく窯を休ませることにした。

× × ×

「ユウキ様、お食事です」

「ありがとう」

僕はムルカのところまで、寝泊りさせてもらっていた。

ムルカは正式に職業貴族になることが決定しており、この辺り一帯を管理する権限を持っている。そのため本当なら、僕は言葉遣いに気をつけなければならぬのだが――

「普通にしていてください。ユウキ様が来なければ、僕は職業貴族になることはできませんでしたし、新しい技術を見つけられもしなかったでしょうから」

そんなわけで、ムルカからは「友達のように接してくれ」とお願いされていた。生まれが生まれだからかもしれないが、僕には様付けをしてくるというのに。

食後、ムルカが言う。

「そろそろ物資を積んだ馬車が到着する頃だと思えます」

「そうか」

実はリサに頼んで、薪と木炭を持ってきてもらっていた。手持ちの薪と木炭を使い切ってしまったのだ。

しばらく待っていると、大量の馬車がやって来た。

「きゃー、ムルカ。久しぶりね！」

「ウインディさん、お久しぶりです」

馬車から降りてきたウインディという女性は、ムルカと知り合いらしい。

「リサから聞いたわよ。偉大な技術を生み出して、正式に職業貴族になったんですってね。羨まうらやましいわあ」

まるで子供を褒めるように言われ、ムルカは気まずそうに答える。

「そのことなのですが……」

偉大な技術や豊富な資源を発見したことになっているが、それは僕、ユウキの功績であって、ム

ルカ自身は何もしていないと正直に打ち明けた。

「そうなの？」

「残念ながら」

「でも、この村の統治権を与えられたのは事実なのでしよう」

「ええ。ここには、陶芸に必要な資源が豊富にあるということで、たまたま」

「いずれにせよ、早く実績を挙げないとね。こんな辺鄙へんびな村でも統治しているというだけで手当てがもらえるんだから」

苦笑するムルカ。

「で、その張本人さんはどこ？」

「ここでやつと僕に話題が振られる。」

僕は自己紹介する。

「初めまして。ユウキと申します」

「きゃー！ 何ていい男なの。夫もそこそこの器量が良かったので結婚したんだけど、もう少し考えたほうが良かったかも」

「……えつと」

少しばかり困惑し、ムルカに尋ねる。

「この人、いつもこうなの？」

「ええ。素直で、本音を隠さず、ついでに感情の波が激しくて」

「こらっ、坊や」

ムルカが注意される。

こりゃあ、ちよつと絡みづらい女の人だな。

「こほん。冗談はここまで」

ウインディはそう言うと、正しい挨拶の形を取る。

「ユウキ代爵様。本日は、我がマーディ木材店にて大量の薪と木炭の注文、誠にありがとうございます
ます」

そして、「今後とも、長いお付き合いをお願いします」と綺麗な一札をしたので、かなり上等な教育を受けている人だ、と僕は確信する。

さっそく持ってきてもらった品物をチェックする。

注文したのは、釉薬の原料と薪と木炭。リストをチェックしていき、それらが間違いないことを確認して、漏れがないように倉庫まで運び込む。

「倉庫の容量を考えると、これがギリギリだなあ」

注文した品は揃っていたので良いのだが、倉庫にすべて入るか微妙だった。運び込める限界まで注文したせいである。

とはいえ今後のことを考えると、薪や木炭はもっと必要なので、倉庫の増設が急務だな。

「代金のほうは、ユーラベルクギルド支部で受け取ってください」

僕はそう言うと、書類にサインした。僕の資金の大部分は、冒険者ギルドの個人金庫に預けてあるので、そっちから支払うように手続きしたのだ。

ウインディは書類に不備がないことを確認してから、大きな革バッグに書類をしまう。

「次回も同じ量をお願いします」

「かしこまりました」

「ちなみに、こんなに頼み続けても大丈夫なんですか？」

僕がそう問うと、ウインディは笑みを浮かべて答える。

「それについては、今後増産する予定です。とはいえ、近年は建築予定の家々がないので、木材は余っているんですよ」

「だったら、薪や木炭を保管する倉庫を増設したいから、大工を呼んでもらえますか。代金は先払いしますので」

僕は言うやいなや、すぐさま書類を書いて渡した。

「注文受けました。すぐに人手を集めて送ります」

こうして僕は、ウインディとの商談をスムーズに終えたのだった。

× × ×

陶器の作業場にやって来た。

薪と木炭の確保ができたので、さっそく製作に入るかな。

実はすでに注文を受けていて、作る予定になっているのは、花瓶と大皿。なかなかの難題だ。花瓶は高さがあり、大皿は横に広いため、ろくろ成形の技術を使うことにした。

水の入った桶かきを用意し、粘土を土台に置いて成形を開始する。

ろくろ台があれば作業は捗はかどるのだが、残念ながらそんな物はない。木の板の下に小石を敷き、回せる台とした。

台を回転させつつ、濡れた手で粘土を成形していく。その様子を見た弟子たちが「すごい！すごい！」と大はしゃぎしている。

苦労して、花瓶を十個と大皿を十枚作り上げ、乾燥のために時間を置く。

日数を置いてから素焼きの工程に入る。これまでは小さめの皿だったので割れる危険性が少なかったが、今回は随分と大きい。

果たして、いくつ素焼きに耐えられるのか……

慎重に花瓶と大皿を窯の中に入れていき、素焼きの準備を行う。窯の外にたくさんの藁、薪、木炭を用意しておき、素焼きを始める。

藁から薪に火が移り、木炭を入れていく。十分な温度に達したらそれを下げないように気を付ける。

素焼きが完了し、中を見ると――

「はあ……やっぱりこうなるか」

どうしようもない事実を確認する。

生き残ったのは半分しかなかった。花瓶も大皿も、半分が碎けるかヒビが入るかして、まったくもって無残な姿になっていた。難易度が高いため、僕の技術ではこうなるのは仕方がない部分もあるが……

無事だった花瓶と大皿を、慎重に取り出していく。

以前と同じように釉がけを行う。面積が大きいので塗り加減に注意する。客から要望があったのでわざとムラを作り、木の葉などで絵付けを数ヶ所行った。

その後、乾燥させたら、いよいよ本焼きだ。

窯の中に一つひとつ並べていき、入り口に火を点け、空気孔を除いて粘土で塞ぐ。藁を入れ、薪を入れ、温度を上げていく。最後に小さく切った木炭を投入し、目標温度まで上げる。

素焼きで半数がだめになったのだから、本焼きでも多くは残らないだろう。そう心配しつつ、水

を飲みながら熱に耐える。

小さな木炭を投げ入れては、火かき棒で動かすという作業を繰り返す。夜が更けても、その作業は終わらなかった。花瓶や大皿は大きいため、時間が必要なのだ。

朝日が昇ってもまだ終わらない。それでもひたすら手を動かしていく。時折眠気が襲うが、灼熱の炎がそれを吹き飛ばす。

昼を越えて夕方となり、日が沈む。

三日目の朝方に本焼きが終了した。

早朝、弟子と客を集めて、窯出しを始める。

皆ソワソワとして落ち着きがない。

「窯の中は煤が大量にあって汚れてしまうので、近づかないようにしてください。なお、窯出し作業は、窯の主である僕か、僕が許した人物でなければできないように制限しています」

事前に、窯に近づかないように注意しておく。

集まった者たちが口々に言う。

「む、そうなのか」

「まあ、あれだけの高温で燃やせばそうなるでしょう」

「窯の中に入れるのは本人か特別な弟子だけ、ということか」

「ホンヤキという、過酷な行程を見せられたのだから、納得せざるをえないな」
「とにかく完成品を見てみることにしましょう」

窯出しを行う僕に視線が集まる。入り口を塞いでいた粘土を金槌で叩いて砕き、入り口を大きく広げた。

花瓶と大皿を取り出す。

一点一点慎重に運び、外に並べていく。

なお、この時点ではどの陶器も汚れていて光沢はない。一度すべて外に出してから布で磨いていく。

陶器が徐々に、本当の姿を現す。

「よし！」

釉薬が反応した焼結がしつかりと出ており、ガラスのような光沢が出ている。

本来であれば、本焼きにはもっと時間がかかる。だが、この地の粘土層に含まれている成分のためか、予想より短時間でできたようだ。

心配していた割れや歪みはほとんどない。

人々が感嘆の声を漏らす。

「すごい。こんなに綺麗になるなんて」

「深みと温かさのある色とツヤ。これまで見たこともない！」

「表面の色だけではなく、質感もまるで違うぞ。どうなっているんだ？」

「金属製の食器の輝きとは根本的に違う」

「むうっ。目の前で見ておきながら、なぜこのようになるのか説明できん」

皆に陶器を触らせて感想を聞いてみたところ、全員が理解不可能という顔をしていたが、一応感激してもらえたようだ。

だが、量産化するには超えなければならない壁は多いな。

窯出しまで終わったので一休みしようとする――

「「譲ってもらえませんか!!」」

一気に詰め寄せられた。さて、ここから無休で商談に入らなければいけないようだ。

僕は商人らしき男に尋ねる。

「売り先に当てがあるのでですか？」

「もちろん！ 美術品収集を好む貴族や商人らに高値で売れるのは間違いありません！」

日常的に使ってほしいと思っていたが、まずはそうした人々に売られるようだ。

まあ、どのぐらいの値がつくのか分からないが、そこは彼らの商才に任せようがいいだろう。どうせ僕に人脈などないし。

その場にいた全員と相談に相談を重ねたうえで、作品をほどよく分配して帰ってもらおうこ

とにした。

それから今後どういった陶器を作っていくかの話し合いになる。

商人が問う。

「どのぐらいの形状や大きさにできますか？」

「……大きい物だと、今回作った花瓶か、大皿程度までなら」

「もう少し外見的特徴が欲しいのですが？」

「……今回も入れましたが、植物の葉のような模様なら、割と簡単に入れられます」

「色合いをもう少し鮮やかにしてはくれませんか？」

「……少し難しいですが……何とかできる範囲で頑張ってみます」

僕はへとへとなりつつも全員と話をし、今後の製作方針を決めた。

要望をまとめると、広間などに飾るために大きめのサイズにしてほしい、色合いを鮮やかにしてほしい、凝ったデザインにしてほしい、という三点だった。

ちなみに、僕が陶器を作る全工程を見て、一度に大量生産するのは完全に不可能だと判断したようだ。そのため、高値をつけて貴族を中心に販売することだった。

弟子と商人たちを帰したあと、リサが必要な物を聞いてくる。

「陶器製作にあたり、ユウキが欲しい物は優先的に用意させていただきますが、何かありますか？」

「では、ここに書いてある物を用意してもらえますか」

僕はそう言っただけで紙を渡した。

リサはそれをじっくり眺める。

「薪に木炭、確かに必要だと思っておりますが……これほどの量ですか。ここまで膨大な量は、需要がないため作り置きがないと思うのですが」

「やはり難しいですか」

そう問うと、リサは首を横に振って答える。

「いいえ、逆に嬉しいです。私の同期に、木材業や木炭製作をしている家に嫁いだ子がいますので、さっそくこの話を持ち込んでみます」

「あと、こちらのほうも確保してもらえますか」

紙に書いておいた別の材料を指し示す。

「メズ石に、イズ石。墨に、酸化鉄に、銅などですか……いろいろありますね。これも必要なのですか？」

「様々な人から、多彩な色合いを出してほしいと言われましたので」

手持ちの釉薬では、発色のバリエーションに限界がある。材料は多めに越したことはないし、何より大量に使用するので備蓄が必要なのだ。

またこれらの材料に加えて、粘土を保存する小屋、弟子たちの住む家も必要だった。それ以外に

窯を作る必要もあり、結構な出費となる。

僕は思い切ってリサに尋ねる。

「……融資、できますか？」

僕がほとんど出すとしても、冒険者ギルドがいくら出してくれるのが問題だった。陶器は現時点では本当に儲かるか分からないのだ。

必要経費を紙に書くと、リサはそれをじっくりと確認する。

「援助はしたいのですが、まだ価値がどれくらいか出ていないので、審査を通すのは難しいですね……」

いきなり多額のお金を出すのは無理だそうだ。結果を見てから判断する、とのことだった。当分は規模を拡大せずやっていくしかないか。

「とりあえず、薪や木炭などの必要な材料を揃える予算は通るでしょう。ムルカ、ユウキが仕事に専念できるように生活の面倒を見てあげなさい」

「はい」

リサに言われ、慌てて返答するムルカ。

僕は話題を変えて、リサに問う。

「あ、あと。ユーラベルクで営業している店はどうなってますか？」

僕の家臣として、様々な店を任せていたガオムらの状況を確認しておくことにした。

リサによると、店は大繁盛しているとのことだった。ギルドからの援助を受けずに大繁盛させているのはすごいことらしい。

皆にはしばらく戻れそうにないと伝言を頼んでおいた。

さて、次の製作のためにも窯の状態を調べないとな。また、中の炭を丁寧にとり落として、亀裂や穴がないかチェックしないと。

× × ×

「ううっ。眠いし、しんどい」

数日後、朝日が昇ったところで、予定していた本焼きが終了した。あとは窯出しだけなのだが、眠気と疲れで体思うように動かない。重労働を不眠不休で続けたツケは大きかったようだ。

窯の前でうとうととしてしまう。

「ユウキ〜」

誰かが声をかけてきた。

そちらのほうを向くとミライナがおり、見覚えのない男性を連れている。年齢は壮年くらいで、身なりが良いので貴族だと思う。他にも数人いるようだが、頭が回らず視界に入らない。

何かの商談だろうと思いい、何とか意識を呼び覚ますと、ミライナが話しかけてくる。

「この前注文しておいた品の見本はできたかしら」

ああ、何だ、そのことか。あとは窯の中から取り出して確認するだけだと説明する。

「ユウキ、何だか疲れているように見えるのだけれど」

「……お気遣いなく、それで」

もう意識を保つのもしんどいが、会話を続ける。陶器であれば何でも買いたいという客を連れてきたそうだ。

ああ、眠い眠い。体が重い。頭がボンヤリする。

品物があるなら、さっそく見せてほしいとのことだったので、疲れと眠気でベッドにダイブしたい気持ちを必死に抑えて、窯の入り口を金槌で壊す。

え〜と、花瓶と大皿は……

重い^{まがた}脛をこすりながら作品を探す。

見た感じどれも割れている様子はなかった。慎重に一つひとつ取り出していく。いつもより重い体を動かして。

すべての作品を取り出し終わった。これでやっと眠れるか。

「」

何か声が聞こえるが、よく分からない。もう寝かせてくれと思っていると、ミライナが近づいて

きた。

え〜と、品物の購入書か。売れるのはどれか？ 品数は？ あ〜もう、考えがまとまらないので花瓶か大皿のいずれか一つで。

書類の内容の文字が読めないほど疲れているようだ。

酷い眠気が襲ってくる。

さっさと選んでくれ。あ〜次は何？ 金額交渉？ すまないけど、ミライナの客なんだしそっちで交渉してくれ。

「そちらに取り引き額を任せる」

短く言うておくと、男性が地面に置いてある花瓶と大皿をしげしげと眺め始める。こっちはさっさと寝たいのだが――

「――でどうか」

「――え、そんなに」

「――であるから」

「――なので」

「――で決定だ」

「――分かりました」

価格交渉は時間がかからずに終わったらしい。

客の男性はしばらく陶器を眺めたあと、購入品を決めたようだ。そのまま持ち帰って良いのか聞かれた——ような気がした。

僕がコクンと頷くと、付き添いらしき人々が現れて品物を丁寧に梱包していく。

これでやっと眠ることができると思っただが、まだ終わらなかつた。尋ねてきたミライナに向かって告げる。

「……え？ 残りの品はどうするのかって？ すまないが、販売と展示用のため、リサギルド支部長のところまで持っていってほしい」

ミライナは、付き添いの男性に慎重に梱包しろと言っていた。

意識が混濁していて、取り引きの内容も金額もきちんと見ていない。まあ、あとで確認すればいいか。

そう判断して重い体を動かし部屋のベッドまで一直線に行くと、ひたすら眠ることにした。

× × ×

深い眠りから目を覚ました。

体を少し動かし、体に異常がないか確認して、ベッドから下りる。

疲れを無視して体を動かし続けたから、本調子に戻すのは時間が必要だな。あとは、栄養を取ら

ないと。

「あゝ、おはよう」

「ユウキ様、おはようございます」

ムルカの家の子が挨拶を返してくれた。居間にムルカがいない。どこかに出かけているようだ。

「すみませんが、今日の日付を教えてください」

あれからどれくらいの日数が経過したのか確認すると、丸一日寝ていたことを知った。

その後、腹が減っているので食事を取ることにした。とにかく食べよう。小さな村なので、食事も質素だった。それでもまあ、食べるだけマシかな。

食後、窯の様子を見に行く。

窯の入り口が開いていた。

あゝそうだった。客が来たので重い体を動かして無理やり開けたのだ。そして、できたばかりの陶器を売って、残りをユーラベルクまで運んでほしいと頼んだのだった。

取り引き内容は詳しく覚えてないが、ま、いいか。

窯の状態をチェックする。いつものように藁の箒で丹念たんねんに掃除する。亀裂たぐいの類はなかった。数時間かけてチェックを終えた。

続いて、次の陶器作りの構想を練る。

ひとまず、今までのやり方を見直してみる。

茶碗、丸皿、平皿の場合は、完成まで問題なく行えた。その一方で、花瓶、大皿の際は、素焼きで半分が使い物にならなくなった。本焼きでは全部生き残ったが、たまたまたったと思う。

いずれにしても、素焼きで壊れないようにする必要があるな。

「温度と時間を調整してみるか。あとは成形の段階でまだ未熟な部分があると思うから、改めて技術を磨こう」

前の世界で得た、陶芸の知識を思い出しつつ、工程を見直す。

次に考えたのは、釉薬についてである。材料が揃ったので新しい物が作れるのだ。自分ならではの特色を出すためにも釉薬作りは欠かせない。

アイデアがいくつも生まれ、とにかくやりたくて仕方がなくなってきた。

「よし、やるぞー！」

気合いが入る。

まずは成形からだ。そこから始めよう。今回は同じ形の物しか作らなかったが、今回はいろいろ製作してみよう。そのあとは釉薬作り。あ、そうだ。弟子たちが素焼きをする窯も必要だな。それ以外にもやることはたくさんある。

とにかく実際にやってみないと分からないことばかりなので、ぼんやりしている時間はない。人

生ひたすら勉強だ。

さっそく粘土を土台に置いて、成形し始める。

手を濡らし粘土をじつくりと捏ねる。そうしながら水分を吸収させ、柔らかい粘土へと変化させる。

続いて、ろくろ成形で大皿の形を作っていく。器の厚みをほんの少しだけ厚くすることにした。ほんの数ミリ程度だが、それが重要なのだ。前回は薄くしすぎて、素焼きで耐えられなかったのだと判断した。

一枚一枚製作していく。枚数は前回と同じ十枚。

次は、花瓶である。

こちらも同じくほんの数ミリ厚みを増して製作する。最初に粘土で平たい土台を作り、そこに細かいひも状にした粘土を、積み上げながら徐々に形にして高さを増していく。なお、この作り方を「ひも作り」という。

ある程度の高さになったら、ヘラと手で形を整えていく。それを何度も繰り返し花瓶の形にする。製作したのは同じく十個。

ここで終了して、乾燥させる。

次に始めたのは釉薬作りだ。釉薬作りは、陶芸家の秘法とも言えるほどに重要である。



まず、各種の草や雑木などを燃やして灰にする。灰釉ではこれが原料となる。他と混ざらないように注意して進める。

その工程を終え、ふるいにかける。灰をさらに細かく均一にすることで、より良い物にできるのだ。

それが終わったら、水簸すいひと呼ばれるアク抜きを開始する。これをやらずに使おうとすると、綺麗なツヤが出なくなるので手抜きはできない。

なおこのアク抜きには二十日ほどかかるため、ここでいったん作業を終える。

乾燥と釉薬のアク抜きをしている間に、素焼き用の窯をもう一つ作ろうと思う。

弟子たちに手伝ってもらいつつ、窯を製作する。耐熱用煉瓦れんがが欲しいのだが、そんな物はこの世界にない。

焼いた煉瓦と、固めた土で製作していく。

中の構造と強度を計算し、どれくらい焼き物を入れるのか考え、全体の設計を行い製作する。煉瓦を組み終えたら、上から土を被せてしっかりと固めて完成だ。

新調した窯で、素焼きに取りかかる。藁、薪、木炭を用意し、大皿と花瓶を窯に入れて素焼きを始める。

火を点け、温度を上げて、火の勢いと窯の中の状態を確認しながら進めていく。

その後、素焼きが完了した。

確認して中から作品を取り出す。

「よし！」

前回の経験を踏まえて改良したおかげで、大皿、花瓶ともに割れていなかった。ここで少し無駄な部分を削る作業を入れた。ヤスリで慎重に削っていく。

しつかりと全体に釉がけをしておく。重ねがけをして僕の陶器としての特色を出す。

いよいよ本焼きに入る。

作品を慎重に窯の中に配置して、入り口を粘土で塞ぐ。

藁に火を点けて薪を足していく、そして徐々に木炭を入れていく。前回よりも窯の中の温度を少し上げる。

必要温度は千度前後なのだが、それより高くすることで陶器に変化が起きるはずだ。もちろん、温度を上げすぎれば、作品は見るも無残むざんになってしまうだろうが……

火の勢いから温度を測りつつ、慎重に作業を進めていった。

× × ×

一方その頃、ユーラベルクギルド支部では――

「えっ？ もう陶器が完成したって！」

リサギルド支部長と、ギルドの幹部たちが、ミライナからの報告を聞いていた。

彼女たちは驚きを隠せなかった。陶器の製作工程を見させてもらって、あまりにも技術レベルが高く、製作には時間がかかると判断していたからだ。

ユウキから預かっている品は、技術者、学者、研究者が解析を進めているが、なぜこれほど美しい出来なのか議論の最中にあった。特に、器全体の輝きの謎は解明できていない。そうして議論が進まないまま、時間だけが経過していたのだが、その最中に、次の品が完成したとミライナが持ってきたのだ。

梱包された品を開けて、全員が息を呑む。

「うおっ！ こ、これは、何とすごい！！」

封を解いて取り出されたのは、大きな皿だった。

基本的には、以前見せてもらった陶器と同じ色だったが、木の葉のような細かな意匠いしょうが施されている。それが皿の雰囲気みまじりをより雅みやびに見せていた。

一つひとつ梱包が解かれ、出されていく大皿。合計で四枚あったが、そのどれもが二つとない品物だった。

「大して日数も経っていないのに……」

「心底驚かされますなあ！」

「うむうむ！」

だが、これで終わりではなかった。ミライナは「次の物がある」と言う。全員がさらに驚く、「まだ次があるのか？」と。

次に取り出されたのは、四個の花瓶。大皿と同じく、数ヶ所木の葉のようなアクセントとなる模様が入っており、色合いもまた違っていた。

全員が言葉を失う。

「……ユウキは、これをいったいどうしろと？」

沈黙を破ってリサが発言すると、ミライナが答える。

「ギルドのほうで展示と販売をしてほしいそうです」

「なるほど」

リサはそう口にして、少し考えた。

「……ちよつと、本人の名前で売るわけにはいきませんね」

「『えっ？』」

その場にいた全員が疑問の声を上げた。

リサは続ける。

「これほどの品、本人の名前で売るのが当然ですが……今はまだ製作を開始したばかり。ユウキは

実績もなく爵位も低いいため、良からぬ貴族が力づくで功績を奪おうとしてもおかしくありません」

ひとまず別名を用意し、ユウキに注目されないようにしておく必要があると。

全員が納得したように頷く。

「そうだな、売りに出せばどれぐらいの値段になるのか分からんしな」

「ユーラベルクにも馬鹿な連中は多いから、それが最善であろう」

「とにかく、直接会うことはできないようにしましょう」

意見が一致して、陶器に関する情報の秘匿が決定した。

「では、どんな名前にするのかを議論することにいたしましょうか」

しばらく考える各人。

一人の幹部が口にする。

「シシンという名はどうであろうか？ 真心を尽くす、という意味だ」

「いいですね」

シシンという名に決定した。

とりあえず、大皿、花瓶、各一点は見本品として所有しておくことにして、他の三点の売り先を見つけることになったのだった。

第二章 成長した家臣たち

「ユウキ様はしばらく帰ってこられないそうだ」

「……そうですか」

「私たちの商売、すごく上手くいっているのに」

「まあ、自由にやれるのはいいけどさ」

「当面は現状維持ですね」

「そうねえ」

ユウキに家臣入りしたガオム、リシユラ、リシユナ、ウルリツヒ、ミオ、リナの六人は、ユウキの知識や技術を使い、各仕事を一手に任される立場になっていた。なお、ガオムは警備隊を、リシユラとリシユナは商店を、ウルリツヒは医療品を、ミオは解体業を、リナは飲食店を、それぞれ任されている。

各店は大繁盛していて何の問題もない。初期投資の安さと立地の悪さを無視して、多大な利益を

上げていた。

ちなみに商売の基本はすべてユウキが考えたものであり、各々はその維持に努めている。

リナの料理店は、「速く、安く、美味い」という方針だった。経費を可能な限り削り、作業手順を限界まで減らすことで、それを実現しているのだ。

また店の特徴として椅子をなくしていた。これについてユウキが言うには――

「人という生き物は、一度座ると動こうとしなくなる。だから食事が終わっても長居してしまうんだ。一食あたりの単価が高いなら椅子を置くのは正解だけど、うちのように速さと安さが売りの店には必要ないんだ」

ということだった。

なので、客は立ったまま食事をするしかない。

確かに椅子を用意すればいやすくなるが、長く居座られると客の回転率が悪くなる。急いでいる客は、そういうのんびりとした店よりも、多少居心地が悪くても手っ取り早い店を選ぶだろう。ユウキの狙いは、長居しない客にあった。

その判断は見事に当たった。

わざと店に長くいられないようにするという逆転の発想に、リナは感心していた。

家臣は各々いろいろな商売の手法を伝授されたが、その一方で共通して言われていることが

あった。

それは「近所付き合いを怠るな」である。

儲かる店は、近所の迷惑になる。儲けを出せば出すほどに、店の前には長蛇の列ができる。そのため近隣は迷惑を被るのだ。さらに、儲けを出しているため嫉妬の対象にもなる。

不評を買ってトラブルに発展させないためにも、ユウキは近所付き合いを徹底させているのだった。

商店を任せていたリシユラ、リシユナにも、特殊な営業方針が設定されていた。

小さな商店であるのだが、商品の数も非常に少ないのだ。ユウキから出された方針は「商品は十点まで」というもの。

商品数を揃えるのが商店経営の定石だというのに、たった十点だけしか陳列できないという枷。リシユラとリシユナは、困惑を隠せなかった。

開店してすぐこそ心配していたが、店を運営してみてもその理由が分かってきた。

確かに、商品数を揃えて見栄えを良くするのは大事だ。だが、それでは他と変わらない、どこにでもあるような店になってしまう。

ならばいっそ、売れることが大きく見込める商品だけを扱って専門性を高めたほうが、店の個性が出るのだ。

ユウキの真の狙いはそこにあったのだろう。

そして結果として出た。

やがて、良い商品だけを扱う店という評判が広まっていったのだ。なお、その売り上げに大きく貢献しているのはウルリツヒの薬剤だった。

ウルリツヒはユウキ直伝の薬剤の製造をして、リシユラとリシユナの店に卸している。

その中でも主力の商品が、手荒れあかぎれに効く軟膏である。

この世界の女性たちの悩みが手荒れだった。それを治すため、ユウキはウルリツヒに軟膏の製法を伝授した。

使っている材料は珍しくない物だが、調合が難しいため、ウルリツヒは何度も失敗しながら覚えてた。

この薬剤は色が悪く、匂いも良くない。

そのせいもあって当初人気がなかったが、効能が広まると飛ぶように売れ出した。口コミは徐々に広がっていき、今では品薄気味である。

ウルリツヒは毎日それを製作するのに時間を費やし、休みが取れない状態だ。

ミオは冒険者ギルドの解体部署で働いている。その理由は、ユウキが開発した「吊り上げ式解体

立ち読みサンプル
はここまで

台」の扱いにいち早く慣れるためである。

吊り上げ式解体台の最大の特徴は、魔物の頭部にフックをかけて吊り上げること。通常では、肉をひっくり返しながらか作業するが、これならそのままの状態で全方向から手を入れられる。

ミオは吊り上げ式解体台を十台確保し、毎日解体作業に従事している。まとめて解体作業を行うことで時間の短縮ができたのだ。

ガオムは警備隊の訓練と指揮をしている。

他の五人と比べて目立つようなことなどないが、今後、ガオムが指揮することになる人数は増加する予定だ。

ガオムもそれを見越して、訓練に身を入れていた。

六人は結果を出すことに必死であった。

ここで結果を出して、少しでも早く自分たちの家を建てる。

彼らはそんな目標を掲げていた。

ここまで良い条件の職場などどこを探してもない。だからこそ、それを任せてくれるユウキの信頼に応える必要があった。

毎日忙しくも充実した時間を過ごす六人であった。

× × ×

「ユウキはしばらく、他の場所で仕事に集中しなくてはならないそうです」

「え〜。お店はすごく順調なのにどうして?」

「何でも、ユウキ以外にできない仕事だそうで……ギルド支部長のリサ様からそう言われました」

「どれくらいで帰ってこられるの?」

「まだ予定が立てられないそうで……」

リフィーア、エリーゼ、リラ、フィー、ミミの五人が不満げに会話している。

彼女たちは、ユウキが運営している店で働きながら生活していた。店のほうは順調で、かなりの金額がギルドに積み立てられている。

ユウキは爵位の授与までの間、いろいろな仕事や準備をしなくてはならないとのこと。それで、近くの村を治めるグレッシャー騎士爵のところにいるらしい。ユウキが何の仕事をしているのか聞いておきたかったのだが――

「申し訳ないけど、今後ギルドの莫大な利益になる仕事の中心人物として働いている、としか言えないわ。これは他言してはだめよ。爵位の授与の準備をしてもらいたいけど、それより優先する仕事を任せているわ」